2017年9月19日

「民主主義の再生へ」–市民と野党の共闘を進めよう–

上智大学国際教養学部教授

中野晃一

新しい市民運動の広がり

多様な運動体の緩やかな連携と共闘態勢

脱原発、アンチヘイト、特定秘密保護法反対運動の流れと展開

「掛け布団」と「敷き布団」

触媒・起爆剤としてのSEALDs

自由主義・個人主義の運動

民主主義の主権者としてのコミットメント

伝えること、繋がること

息を吹き返した平和主義

「個人の尊厳」の擁護を「エトス」（精神・文化）とした緩やかな連帯の政治へ

個人の自由・尊厳に基づいた新たな政治参加のはじまり

同一性（アイデンティティ）ではなく、他者性を前提とした連帯

安保法制反対運動の示した希望

立憲主義、民主主義、そして平和主義へ

空洞化した国家の威信を振り回す寡頭支配に対して、

個人の自由や尊厳の擁護を旗頭に「リベラル左派連合」が組めるか

→「市民連合」の結成

安倍自民党の「実力」と選挙戦略

「絶対得票率」（棄権者を含めた有権者全員のうちの得票率）

小選挙区で「4人に1人」（25%弱）

比例区で「ほぼ6人に1人」（16～18%台で推移）

2012年、2014年の「圧勝」も、実際には2009年の「惨敗」より得票数が低い！

↓

自民党の戦略は（1）立憲野党の分断＋（2）低投票率

↓

市民と立憲野党は（1）共闘体制をつくる＋（2）政治を諦めた人たちを呼び込む

2016年参議院選挙における市民連合の戦略と結果

（1）1人区で野党候補を一本化する

32の1人区全てで、曲がりなりにも、野党候補の一本化に成功した。

11の1人区で勝利したのは、野党共闘の成果。統一候補は一定程度無党派層を呼び込んだ。

（2）明確な対決軸で投票率を上げる

投票率は、前回の参議院選挙での52.6%から54.7%と2ポイント程度上げることができたが、戦後4番目に低い数字にとどまり、狙ったほどまでに上げることはできなかった。

（3）複数区・比例区でも野党票を押し上げる

複数区や比例区で野党候補同士が限られた野党票を競うという構図を崩しきることができず、伸び悩んだ野党候補が最後の議席を争う構図が随所で見られた。

一人区以外で戦略が不発に終わった理由

（1）争点隠しと参院選隠し

テレビでの参院選報道が前回比で3割減だったように、改憲勢力が3分の2を参議院でも獲得しかねない歴史的な選挙であったにもかかわらず、都知事選によって参院選そのものが隠された。自民党が公開討論を拒否、野党側が改憲危機の争点化を迫ったものの不発。

（2）野党票の伸び悩み

争点隠しで逃げ切られた結果、野党側の政策が注目されることはなく、投票率は少ししか改善せず。野党共闘は一人区に止まり、「説得力のある」野党共闘を複数区や比例区で浸透させるには至らなかった。何のための野党共闘なのかを伝える努力が足りなかった。

野党共闘の深化により改憲を阻止するために

（1）維新・小池新党・民進党右派系を切り崩すネオリベ改憲への警戒と対応

民進党は、改憲論議に乗るのではなく、森友・加計や日報問題で明らかになった政官関係や統治機構の「改革」提案で持ち味を発揮すべき。また生活を立て直す経済政策などに取り組むべきことを主張していく。

（2）まどろっこしい野党共闘への批判を真摯に受け止める

まどろっこしく妥協に満ちた野党共闘路線への批判を謙虚に受け止め、敵を見誤らないようにする。

（3）野党共闘の深化

候補者選定の公開性、市民参加の可能性の模索。政策協議の深化、エッジの効いたプレゼンテーションへの意識を高める。無党派層＝「真ん中」は根拠のない思い込み。むしろ政策としては「反安倍」色が鮮明で、そこを取りにいくべき。